

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520159

研究課題名(和文)日本人作曲家の独創的音楽語法に関する研究

研究課題名(英文)A study for an original narrative of Japanese contemporary music composer

研究代表者

河添 達也 (KAWASOI, Tatsuya)

島根大学・教育学部・教授

研究者番号：20273914

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：現代日本を代表する作曲家，湯浅譲二と細川俊夫作品の楽曲分析研究，演奏法研究を行い，彼らの代表的作品である「室内オーケストラのためのプロジェクション」および「春の庭」の2曲について，それらの融合による合奏指導法研究実践を行った。また，同時代の西洋人作曲家との比較研究を通して，日本人作曲家の独創的音楽語法の解明を試みた。

さらに，現代音楽研究セミナーを主宰して，湯浅作品をはじめとする現代作品への接触機会の創出に努めた。

研究成果の概要(英文)： Mr.Joji YUASA and Mr.Toshio HOSOKAWA are famous Japanese composers in the contemporary music field. I analyzed their masterpieces from view of their structures and performance methods. I made a study for coaching of chamber ensemble, especially Yuasa's "Projection for Chamber Orchestra" and Hosokawa's "Im Fruehlinggarten" I also tried to find an original narrative of Japanese contemporary music composer by a comparative study of these two Japanese composers and western composers from same ages.

I have organized a contemporary music seminar & festival called "Akiyoshidai's summer" every year, which invited Joji YUASA.

研究分野：作曲

キーワード：現代音楽 作曲法 合奏指導法

1. 研究開始当初の背景

現代の作曲創作界では、いわゆる「前衛的現代音楽」創作時代が終焉期を迎え、代わって、現代人の感受性の鈍化に疑問を投げかける、繊細で豊かな音響作品が生み出され始めている。たとえば、現代日本を代表する作曲家である湯浅譲二や細川俊夫は、自著やプログラムノートのなかで、作曲することの意義を、松尾芭蕉の俳句や禅僧の書・水墨画と関連付け、「かつて日本人が有していたであろう繊細で豊かな感受性を取り戻すための問題提起」だと規定し、その作品は「作曲者のコスモロジーの反映」だと述べている(湯浅「人生の半ば」および細川「魂のランドスケープ」など)。では具体的に、湯浅・細川作品のどのようなところが、現代日本人の感受性鈍磨を自覚させる独創的な音楽語法といえるのか。イタリアの音楽学者 L. ガリアーノは湯浅作品に「謡い」の影響があることを、湯浅の言動分析から指摘しているが(同氏「Music by Joji Yuasa」)、楽曲分析的な作品研究として、その根拠が言明されている例は少ない。一方細川は、前掲自著やプログラムノートを通して、自作品の「時間性」と「空間性」に日本伝統音楽概念の援用があることを度々述べているが、細川作品の客観的作品研究に至っては、わが国では殆ど行われていない現状である。

2. 研究の目的

そこで、精緻な両氏の作品分析研究の必要性を感じ、それを「楽曲分析」と「演奏法研究」の両面から行うことのできる「音楽研究セミナー」(山口県「秋吉台」における現代音楽セミナー&コンサート)を主宰し、両氏を招聘して合計 20 年間にわたる資料の蓄積を行ってきた。この蓄積と同セミナーの継続実施とによって、両氏作品の楽曲分析研究と演奏法研究を進め、その独創的な音楽語法を明らかにしようと企図した。さらに、同時代の西洋人作曲家作品との比較分析を行うことで、日本人作曲家の持つ独創性を探るうとする試みが、本研究の全体構想である。

3. 研究の方法

湯浅・細川と比較対象者である M. Jarrell, I. Fedele 各氏に対する楽曲分析研究、演奏法研究、および本人へのインタビューによる思想研究を基盤とし、そこから得られた基礎資料を、「現代作品と伝統音楽の美意識」、「日本人作曲家と西洋人作曲家の音楽語法」という視点で比較検討することによって進める。湯浅氏へは新作の委嘱も行い、作品の生成過程についても取材と分析を行う。

また、両作品の一般社会における積極的な接触機会の創出を図るとともに、教員養成系カリキュラムにおいても両者の作品を取り入れて合奏指導法研究を行い、学校音楽教育へのレパートリー拡充にも努める。

4. 研究成果

以下(1)~(6)の6項目にまとめて簡易に記述する。

(1) 細川俊夫作品と湯浅譲二作品の楽曲分析的な研究と演奏法研究との融合による合奏指導法研究

細川俊夫「春の庭にて」

2002年9月に、スイスのルツェルン・フェスティバルで、主にウィーン・フィルのメンバーからなるウィーン・リンク・アンサンブルによって初演された細川の代表的な室内楽作品であり、多くの細川作品に共通する特徴的な時空構造を持っている。使用されている音組織は、いわゆるメシアンの「移調の限られた第2旋法」を中心に構成されている。そのため垂直方向の響き、つまり和音構造としては減七の和音が骨格とし響き、その構成音と短2度や短9度の位置関係にある付加音が重ねられ、独特のテンションと奥行きを伴った音響空間が創出されている。細川自身は1980年代に、このような音構造を「核音」と「衛星音」と名付けて説明していたが、音組織としては、曲全体を通して大きく変化することはなく、西洋古典音楽風言えば、解決しないドミナントの和音が1曲を通して通奏低音のように共鳴している、と形容できるであろう。しかしながらこの曲は、極めて豊かな情景や心象風景の描写性を感じさせる。それは、繊細な音色の変化や、細やかに書き込まれたダイナミックとアーティキュレーション、使用音域の変化等によって紡ぎだされる。さらに、ほとんどテンポ感を感じさせないきわめて緩やかな速度や、アン・カウンタブルな拍節感によっても、きわめて緊張感の高い音空間が創出されている。特に、短いフレーズが各楽器間で時間的に少しずつずれて奏され、ヘテロフォニックな音響が生まれることで、西洋近代音楽の拍節感とは全く異なる、永続的、円環的な音楽の流れがダイナミックに形作られている。この短いフレーズには、3連符や5連符などの細かいリズムが使われているが、これらを西洋近代風に数学的に割り切って演奏してしまうと、上述したようなダイナミズムは生まれてこないのが注意が必要である。細川独自の遠近法による管弦楽法も特筆される。この曲では、木管楽器に鳥の鳴き声が描写されているが、換言すれば、管楽器が近景を、弦楽器がその借景としての遠景を描写しているともいえる。このような楽曲分析的視点を伝えながら半年にわたって合奏法の授業を行い、2014年1月13日に成果発表としての公開演奏を行った。なお、当日は、チャイコフスキーやベートーヴェンの作品も他の指揮者によって演奏され、西洋古典音楽との構造的な差異や、日本人作品の独創的な息遣いや「間(ま)」といった語法の特徴を、明確に相対化することができた。

湯浅譲二「室内オーケストラのためのP

ロジェクション」

湯浅譲二の作風は、「芭蕉の情景」というタイトルに代表される、何かのストーリーに基づく心象夕景や情景の描写を念頭に置いた作品群、それとは逆に純粹な「音響エネルギーの時間軸での推移」を視座とするプロジェクト・シリーズなどの作品群、謡いの独特な節回しや雅楽の拍節構造を取り入れた日本伝統音楽に立脚するもの、舞台での動作を伴うシアトリカル作品、さらに電子音楽と多岐にわたるが、中でも、日本の独創性との対極にあるかに見える「プロジェクト・シリーズ」に潜む日本的独創性を読み解くことで、湯浅作品全体に共通する音楽語法の一端を捉えようと試みた。

この曲の冒頭でまず注目されるのは、「間(ま)」の多様性の表出である。例えば、1小節目は木管とピアノによって16分音符の短い一撃が穿たれるが、その後2拍半余の全楽器の一斉休止がある。物理的にも明白な沈黙としての「間(ま)」である。その後、16分音符、3連符、付点8分音符、4分音符と16分音符のタイなどの音価が現れるが、その背後に弦楽器による借景のような和音がノン・ヴィヴラートで響いている。これも1種の「間(ま)」の在り方である。さらに3小節目では管楽器の伸ばしがディミヌエンドすると同時にピアノとシロフォンがトレモロを奏して音の場を創出するが、この瞬間も、それまででない新たな音の身振りによって「間(ま)」の空間がデザインされているのである。冒頭3小節の中に、「動」「静」の動きが3回反復されているのだが、その「静」の部分は、「時間軸上における異なる音響エネルギーの推移」によって差異化されている。つまり、「間(ま)」の多様性が表出されているのである。それ以降、次々と音の形態が変化し、ほとんど(ドイツ古典音楽のような)前後との主題変奏的な繋がりは見いだせないが、変容していく「間(ま)」の連続体として、これらの音響の移ろいを捉えることもできるだろう。このような「間(ま)」を挟みながら、音の形態は、同音反復、音階的下降、上行、上・下降の同時進行などへと発展し、最後は曲中の最高音であるヴァイオリンとヴィオラによるg音と最低音のバズーン+ダブルベースのcis音とによるトリトヌス音程によって曲を閉じる。機能と声と主題変奏的構成とに慣れている音楽学生の耳には、この曲は掴みどころが無く、問いに答えられないまま終結するような不全感を与える。しかし、この曲を貫いている「間(ま)」の多様性を注視し傾聴することで、ドライな音響の背後にある日本的な息遣いを感じ取ることができた。先述の細川作品と同科目の授業で取り上げ、2013年1月12日に成果発表を行った。

(2) 西洋人現代作曲家との比較分析研究
Michael Jarrell と Ivan Fedele を当初比

較対象者として予定していたが、分析を進めるうち、特に Fedele の 2000 年代以降の作風に変化が見られるようになったため、その代替者として Pierre Boulez 作品を取り上げた。Jarrell 作品では、特にリズムの精巧な変容によって構築されている「Modification」の構造分析による相対化を試みた。

Boulez 作品では、7台のチェロのための「Messagesquise」の詳細な形態分析を行い、日本の音楽語法の独創性との相対化を試みた。この作品は、篤志家 Paul Sacher へのオマージュとして作曲されたことから、基本的なモチーフを Sacher (es, a, c, h, e, d) の6音で構成し、その音列を「Kreuzspiel」という回文の変換によって変奏させている。極めて論理的なシステムによって音変換が行われており、表出する音符上における音変換システムが厳格に保持されている。余白や間(ま)といった背景への視座は見受けられず、細川や湯浅の音楽語法との差異を浮き彫りにした。

(3) 現代音楽作曲法研究セミナーにおける湯浅・細川作品の接触機会創出

限定されている現代音楽への接触機会の積極的な拡大も、本研究の軸の1つである。作品や作曲者本人によるレクチャー等への接触機会が無ければ、本研究成果の省察も困難だからである。研究者は4半世紀にわたって我が国最大規模の現代音楽セミナー&フェスティバルを山口県秋吉台で主宰しており、近年は湯浅譲二を主要講師に迎えている。

2013年、2014年、2015年のいずれも8月18日から23日までの6日間、湯浅氏による3コマのレクチャー(「自作を語る」と作曲マスタークラスを開設して、その音楽語法に関する貴重な接触機会を創出した。また、一線級の演奏家による演奏会のプログラミングも行った。研究期間中に演奏された湯浅作品(とその演奏者)は下記のとおり、延べ15曲にのぼる。

秋吉台の夏 2013

- ・「ヴィオラ・ローカス」(Vla. 般若佳子)
- ・女声合唱組曲「ふるさと詠唱」(西川竜太指揮、女声合唱団「暁」)
- ・児童合唱のための「擬声語によるうたあそび」(同上および防府少年少女合唱団)
- ・女声合唱曲「カヒガラ」(「暁」)
- ・「冬の思い出」(「暁」)

秋吉台の夏 2014

- ・「2つのパストラール」(Pf. 藤田朗子)
- ・「プロジェクト・トポロジク」(Pf. 中山敬子)
- ・「チューバ・ローカス」(Tub. 橋本晋哉)
- ・「コングラチュレーションズ」(山澤慧)
- ・「チェロとピアノのプロジェクト」(Vc. 山澤慧, Pf. 藤田朗子)
- ・「ソリチュード・イン・メモリアル T.T.」(Vn. 松岡麻衣子, Vc. 山澤慧, Pf. 中山

敬子)

秋吉台の夏 2015

- ・「ヴィオラ・ローカス」(Vla. 般若佳子)
- ・「バスクラリネット・ソリテュード」
(B.Cl. 山根孝司)
- ・「サブリミナル・ヘイ・J」(Pf. 黒田亜樹)
- ・「内触覚的宇宙」(Vc. 山澤慧, Pf. 中山敬子)

(4) 細川・湯浅作品の新作初演時への参画と本人への聞き取り調査

湯浅への聞き取り調査は、(3)に記述した「秋吉台の夏」現代音楽セミナーにおいて、2013年、2014年、2015年のそれぞれ8月に行った。特に2014年には、湯浅の電子音楽作品「ホワイトノイズによる<イコン>」の音響設計楽譜を本邦初展示し、本人への個別聞き取り調査を実施した。氏が独自に考案した記譜法やテクノロジー発展によって得られる発想転換などの情報を得た。下の写真はその様子。



また、湯浅作品の初演作品の聴取については、2015年3月20日、「第7回低音デュオ演奏会」(東京・杉並公会堂)における「ジョルジオ・デ・キリコ」にリハーサル時から立ち会った。この湯浅の新作は、本研究と低音デュオメンバーとの共同委嘱作品である。

さらに、湯浅は作曲と同様の姿勢で編曲も行う(本人談)とのことだが、2007年に島根大学吹奏楽団が委嘱したJ.S.Bachの「平均律クラヴィーア曲集第22番 b-moll, BWV867」の吹奏楽編曲の改定を依頼し、2012年12月に完成、修正版初演を行っている。この楽譜浄書作業を分担し、湯浅の編曲統合過程に参画することができた。

細川作品については、2014年10月25日、ドイツのケルン・フィルハーモニーホールにおいて、氏の新曲「Fluss (弦楽四重奏とオーケストラのための)」(アルディッティ弦楽四重奏団+ケルン放送交響楽団)のリハーサルと本公演を聴取し、細川本人から出版前のスコアの閲覧を許された。

(5) 研究発表とディスカッション

2014年10月21日、フランス、ストラス

ブル市において、「日本人作曲家の独創的音楽語法について - 西洋音楽と日本伝統音楽との出会いがもたらしたもの - 」(日本学術振興会ストラスブル研究センター)と題した成果発表を行った。

明治期の西洋音楽受容史とその後の日本の音楽教育の実態を述べ、その中で培った日本人現代作曲家の独創的音楽語法について、特に時間と空間を捉える独創的視点から発表した。研究者本人が尺八本曲を部分的に実演し、その独自の時空の在り方を示すとともに、湯浅譲二の「相即相入」(2本のフルートのための)および細川俊夫の「垂直の歌」(フルート・ソロのための)の一部を演奏補助者によって紹介し、尺八本曲の持つ時空の在り方との類似性について述べた。さらに、同日、細川、湯浅両作品を含む日本人作曲家作品のみによるフルート&ピアノのデュオ・コンサートを企画し、研究者の新・旧作もプログラムに取り入れた。研究者の旧作は、(2)で分析したBoulez作品の作曲技法と尺八本曲の時空概念とを融合させた作品で、新曲の方は、シューマンのピアノ独奏曲と尺八本曲との「融合しない融和」を試みた作品である。いずれも本研究成果の果実が取り込まれている。プログラムは下記のとおりであり、2日後にはドイツのケルン音楽大学でも同じコンサートを実施し、細川の同席も得た。

- ・徳永崇「AMA 1C-2」
- ・武満徹「雨の樹素描」
- ・細川俊夫「垂直の歌」
- ・吉松隆「デジタルバード組曲」から
- ・湯浅譲二「内触覚的宇宙」
- ・河添達也「アロウサイクル」
- ・河添達也「異考共生の断片」(初演)

上記の新作「異考共生の断片」は、2015年8月の秋吉台の夏2015コンサートにおいて、湯浅立ち合いのもとで再演した。

(4)でも言及した2015年3月20日の「第7回低音デュオ演奏会」で研究者の新作「異考共生の断片」(声とチューバのための)を発表した。3年間の研究成果を援用した作品創作であり、リハーサル時から湯浅譲二の参画を得て、高い評価を得た。

(6) まとめと今後の課題

日本を代表する存命中の作曲家に焦点を当て、その作品の楽曲分析的研究と、それを生かした合奏指導法の実践研究を融合させた点に、まずは本研究の独創性を見出すことができる。また、これまでほとんど日本では言及されたことのない細川作品の楽曲分析的研究に着手することもできた。今後は、まとまった学術論文の形でこれらの成果を提示したい。

また、普段接触機会の少ない現代音楽作品を教員養成課程の講義で取り上げ、一般市民にその成果を広く公表することで、研究成果

の社会への還元や教育界に対する教材レパートリー拡大への提案も行うことができた。

さらに、作曲創作に携わる専門家集団を対象とした現代音楽特化型のセミナーを主宰し、創作実践者の視点による音楽語法研究成果の還元にも努めることができた。特に研究対象者のひとりであった湯浅譲二本人を招聘して、6日間という規模で集中的なレクチャーとコンサート実践の場を継続的に催した実績は、世界でも「秋吉台」での実践が群を抜いており、本研究の基盤を支える果実といえる。また、研究者本人が作曲創作に携わる実践家であり、本研究成果をもとに新たな楽曲創作を行って公表できた意義も大きい。当初目的の1つであった、湯浅への新作委嘱も実現し、その創作過程（統合過程）に立ち会えたことも本研究成果の1つとして特筆できる。

ただ、研究対象者とした細川、湯浅の2名のみの作品研究によって、汎用的な日本人の独創的音楽語法を導き出そうという試みには、やや論理的な飛躍があったことも否めない。また、研究後半は、細川作品への分析研究への配分が幾分手薄になったことや、在欧作曲家との比較分析研究についても、十分な結論を導き出すまでには至らなかった。今後の課題としたい。

< 参照楽譜 >

細川俊夫：9人の奏者のための「春の庭にて」, Schott Japan Company (レンタル)
湯浅譲二「室内オーケストラのためのプロジェクト」, Schott Music Co. Ltd. (レンタル)

5. 主な発表論文等

[作品発表] (計 3 件)

河添達也「異考共生の断片」(2015), 低音デュオ第7回演奏会委嘱作品, 2015年3月20日, 東京都杉並公会堂, Vo. 松平敬・Tub. 橋本晋哉

河添達也「Empathic Fragment」(2014), 現代日本作品コンサート, 2014年10月21日, ストラスブール音楽院 (フランス・ストラスブール市)・23日, ケルン音楽大学 (ドイツ・ケルン市), Fl. 村上景子・Pf. 中山敬子

河添達也「古代の声 - 出雲のコスモロジー, クラリネットと弦楽四重奏のための」(2013), 古代出雲文化フォーラム, 2013年3月3日, 有楽町朝日ホール (東京都有楽町) NHK 交響楽団団員 (Cl. 山根孝司, Vn. 松田拓之, 山岸努, Vla. 御法川雄矢, Vc. 宮坂拓志) 指揮: 河添達也
図書「神話・青銅器・たたら」島根大学編著・今井書店 (2013) に楽譜掲載

[演奏実技 (指揮)] (計 2 件)

指揮: 河添達也, 第59回島根大学管弦楽

団定期演奏会, 細川俊夫作曲「春の庭にて」, 2014年1月13日, 松江市総合文化センター (島根県・松江市)

指揮: 河添達也, 第58回島根大学管弦楽団定期演奏会, 湯浅譲二作曲「室内オーケストラのためのプロジェクト」, 2013年1月12日, 松江市総合文化センター (島根県・松江市)

[学会発表] (計 2 件)

河添達也, 「湯浅譲二・細川俊夫を中心とした日本人現代作曲家の独創的音楽語法を探る試み - 秋吉台国際20世紀音楽セミナー&フェスティバル (第1ターム秋吉台) ~ 秋吉台の立つ2001 - 2015 (第2ターム) を通して - 」, 「秋吉台の夏2015現代音楽セミナー&コンサート」, 2015年8月18日, 秋吉台国際芸術村 (山口県美祿市)

河添達也, 「日本人作曲家の独創的音楽語法について - 西洋音楽と日本伝統音楽との出会いがもたらしたもの - 」, 日本学術振興会ストラスブール研究センター・レクチャーカンファレンス, 2014年10月21日, 日本学術振興会ストラスブール研究センター (フランス・ストラスブール市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

河添 達也 (KAWASO1, Tatsuya)

島根大学・教育学部・教授

研究者番号: 20273914